

書 評

稲葉佳子『オオクボ 都市の力—多文化空間のダイナミズム』

学芸出版社 2008年 191p. 1,800円 (税別)

森川 (1975) によると、1970 年代前半までは、日本や中国、ヨーロッパなどの一部の都市を除けば、社会経済的地位と家族的地位とともに、民族的地位が都市内部の居住分化における重要な次元とされてきた。その後の日本の都市内部の居住分化に関する研究でも、民族的地位はあまり重視されていない (上野 1982, 園部 1985 など)。それは、他国と比べて、厳格に外国人の移住を制限してきたこともあって、民族的な差異が極めて小さいことと関係が深い。

ところが、出入国管理及び難民認定法が 1989 年に大幅に改正されてからは、在日コリアンや在日中国人といったオールドカマーとその子孫ではない、いわゆるニューカマーと呼ばれる外国人が多く流入しており、登録外国人数は 2005 年末には 200 万人を超えた。

こうしたなかで、群馬県大泉町のように、近年登録外国人数が総人口の 10% 以上も占める自治体も出てきている。ただし、外国人が急増する時期や国籍構成には大きな地域差があり、それに伴って、ニューカマーと、日本人やオールドカマーとの共生のあり方など、ニューカマーをめぐる課題にも地域性が現れている (戸井田 2005)。

本書でいう、新宿区大久保 1, 2 丁目と百人町 1, 2 丁目からなる「大久保」とその周辺は、ニューカマーを受け入れてきた地区の先駆けと位置づけられ、これまで、社会学者のほか、都市計画の専門家である筆者らが中心となって設立された研究グループ「まち居住研究会」などによって、この地区の外国人居住と住宅問題に関する数多くの研究が蓄積されてきた (奥田・田嶋 1993, まち居住研究会 1994)。

そのなかで本書は、2000 年代も含めた大久保の発展過程を紹介しているところに特徴の 1 つが

ある。特に筆者は、大久保がニューカマーの流入とその活動によって、ダイナミックに変貌し続けている点に注目している。この地区について、本書のタイトルや本文のなかで、その意味を込められている場合に、大久保ではなく、「オオクボ」と記されている。そうした「オオクボ」を通じて、筆者は「都市とは何か」という問いに答えようとしている。

本書は 6 つの章から構成されている。第 1 章「誘惑される「オオクボ」案内」では、1990 年代からのこの地区のエスニックタウンへの変貌や、複雑な事情を抱えた住民層などについて概説される。

外国人が経営する店舗や事業所といえば、在日コリアンや華僑の料理店があるに過ぎなかった大久保では、1990 年代に入ると経営者が多国籍化するとともに、多業種化も進み、細路地にも立地が進んでいく。そして、2000 年頃には、大久保 1, 2 丁目にコリアン系店舗や事業所が集積する一方、百人町は多国籍化が進行するという地域分化が現れたという。

さらに、そうした変化が平面的にだけでなく、垂直的にも進んでいることが図示されている。以降で触れる第 4 章では、こうした施設などが高層へ進出していく様子がより詳細に説明される。

一般的な大都市中心部でのビルにおいて、低層階には物品販売や社交娯楽といった高地代負担が可能な機能、中層階には業務機能、高層階には居住機能がそれぞれ立地するといった機能分化があることが明らかにされて久しい (戸所 1986, 山下 1991)。こうした分化はエスニックタウンでも確認できるとともに、この地区では高層階にモスクが立地するなど、そうした分化に民族的特徴も反映されることを示している。

第2章「なぜ外国人は大久保に集まってきたのか—多様な住宅ニーズに応えられる仕組み」では、1990年代以降の外国人の集住と住宅市場との関係とその変化について、主に、1990年から2001年にかけて5回行われた大久保とその西隣の北新宿での調査結果をもとに説明される。

大久保とその周辺地区は、歌舞伎町に隣接するために、外国人ホステスにとってアクセスがよく、また安い木賃住宅が多いことから、留学生にとっても、絶好の居住地であった。

ところが、そうした住宅が再編され、アジアの経済水準が向上してきた2000年代に入ると、賃貸マンションへ転入する外国人が多くなり、その国籍や職業、家族の構成といった属性が多様化したことが明らかにされる。

さらに、賃貸住宅のオーナーや不動産業者が、外国人に対して寛容に対応するようになったり、外国人を顧客対象とする、外国人の不動産経営者が登場するなど、外国人とこの地区のゲートキーパーとの関係が変化していることも言及される。

第3章「どのようにしてエスニックタウンは発展したのか—同胞から日本人へ市場を拡大していくまち」では、1991年から2006年にかけて6回行われた建物の悉皆調査の結果を基にして、「エスニック系施設」の立地展開とその変化を中心に説明される。

この「エスニック系施設」とは筆者独自の定義であって、看板や表札などにより、その存在が市街地空間において可視化された施設で、そのエスニック集団独特の商品やサービスを扱っていたり、日本語が未熟な外国人を対象に商品やサービスを提供する施設である。

1990年代のエスニックフード・ブームとバブル経済後の不況は、エスニック系施設の急増や多業種化を促して、大久保1、2丁目付近ではコリアンタウン化する一方で、JR山手線を挟んだ西側では中国・台湾系施設を中心として多国籍化が進んでいるという、大久保内部での地域分化について詳述される。

また、こうした施設のなかには、日本人客も取

り込むために、看板やメニューなどに日本語併記を始めたものもあったが、2000年代には、そうした工夫は陳腐化したうえに、日本人経営者が参入するなど、エスニック市場の競争は激化した。すると、施設を大型化したり、装飾にエスニック色を強めたり、道路とのアクセスを重視しない施設のなかには、マンションやビル内に入居するといった新たな差別化が進んだという。

第4章「なぜダイナミックな都市変容が起きたのか—スモールビジネスから発展していくまち」では、大久保内部の特徴ある5本の「通り」を取り上げて、それぞれの通り沿いでのエスニック系施設の立地の変遷過程について説明される。

江戸時代からの町割りが残るこの地区には、名も無い細路地が多くあり、そのなかでも、JR新大久保駅の南西に位置する「一番街」という細路地は、資金力のある者によって、1990年代前半からエスニック系施設が集積してきたのに対して、大久保1丁目内部を縦走する「オオクボの竹下通り」やJR新大久保駅の北西に位置する「ムスリム通り」といった、筆者が名付けた細路地は店舗の立地条件として絶好とはいえず、信用力や資金力に欠けるニューカマーによるスモールビジネスを開始するのに好都合だった。

一方、表通りに相当する職安通り沿いやJR山手線の西側の久保通り沿いでは、ともにバブル経済崩壊に伴う空き物件の増加がエスニック系施設の進出を促してきた。

職安通り沿いは、1980年代にコリアン系商業施設や教会が立地して、コリアン事業主による多業種展開によって、この地区のコリアンタウン化が進んでいった。これに対して、大久保通り沿いでは、店主の高齢化に伴う廃業もエスニック系施設の集積を促したことが指摘される。

第5章「大久保から「オオクボ」への軌跡—周縁性と移民都市」は、江戸時代からニューカマーが急増する1980年代以前までの大久保の歴史について概説される。

下級武士の屋敷地であったこの地区は、明治後期になって郊外住宅地へ変貌していくが、そのな

かには小泉八雲や孫文といった著名人のほか、宣教師や教師などの外国人の流入と集住がみられたという。

さらに、東京大空襲によって新宿から大久保にかけての一带の市街地の9割が消失したが、大久保と隣接する歌舞伎町の復興には有力な台湾華僑の林以文が参画して、その後の台湾華僑やコリアン事業主、歌舞伎町への通勤者の集積に深く寄与していた。

また、在日韓国人である重光重雄が創業したロッテが、1950年にガム工場を大久保2丁目に立地させたりと、常に外国人と深く関わり、新住民を受け入れてきたというこの地区の歴史的風土が、今日の大久保の特徴に大きく影響を及ぼしている点を、筆者は強調する。

最後に、第6章「都市の生命力と多様性」では前章までの内容を総括して、オオクボからみた都市の本質について言及される。

そのなかで筆者は、日本人と外国人との間の軋轢などの問題を抱えつつも、前章までにみられた職住関係や住民層をはじめとして、ありとあらゆるものの混在を受け入れてきた、オオクボの多様性に対する包容力を、都市の本質とみている。

本書は、筆者の博士論文(稲葉2006)をベースとしているが、第2章での1990年代の内容は、過去に公表された調査報告の1つであるまち居住研究会(1994)を再構成したものとなっている。

ただし、この地区のニューカマーの集住に関して、まち居住研究会(1994)では、居住地選択の過程まで踏み込んでいたのに対して、本書での2000年代の説明は、主として住民構成の内容に留まる。

1990年代前半までとは異なり、1990年代後半からはインターネットが普及して、それは居住地選択における重要な情報源の1つとなっている(インフォプラント2006; Palm and Danis 2001)。また、2000年代に大久保へ転入したニューカマーの若者は、母国でインターネットに馴染んできている(田嶋2005)。そのため、1990年代のニューカマーの居住地選択とは異なる結果が予想される

だけに、今後の調査結果の公表が待たれる。なお、第5章の内容は、本書より5ヶ月前に出版された稲葉(2008a)に、第2章と第3章の内容は、稲葉(2008b)にもまとめられている。

本書は、大久保の地域性とその形成過程について、膨大な一次資料や統計資料に基づいた記述を中心としており、また、その方法として、古地図2枚を含めた24枚もの地図が用いられており、この地区の地誌書のような特徴をもっている。さらに、表紙や裏表紙と、40枚以上の巻頭のカラー写真のほかに、33枚のモノクロ写真も盛り込まれていて、文章や図表だけは伝わりにくい、エスニックタウンの雰囲気などを伝えている。

こうした方法は、まち居住研究会(1994)を踏襲している。しかしながら、地図に方位や縮尺の記号がない欠点も引き継がれている。また、巻頭のカラー写真のうちの13枚以外の写真は、地図とリンクされていない。特にエスニック系施設を棟毎にプロットした詳細な地図もあるので、縮尺や撮影対象の位置も付されていれば、そうした施設の規模や集積の程度をより理解しやすいだろう。

このように地域性を丹念に説明されていることは、別な視点からみると、それは例外的な特徴を挙げている可能性もある。そのため、「都市とは何か」という本書の目的に対する、筆者の結論に相当する第6章では、他の外国人集住地区との比較などによって一般性も示される必要があると思われる。

また、大久保の多様化を支える他の地域との関係も無視できないはずである。評者は2009年に数度大久保へ訪れたが、そこではエスニック系店舗と関連するトラックや営業車が頻繁に往来し、駐車されており、他の地域との分業も進んでいるように思われた。

いずれにしても、評者は本書に刺激されて、大久保を訪れている。本書は、ダイナミックな変化をみせる大久保の魅力を多くの読者に伝えて、そこへ彼らを誘う力を持っているに違いない。

文 献

- 稲葉佳子 2006. 新宿区大久保における都市空間の変容と生成に関する研究. 法政大学大学院工学研究科博士論文 (評者未見).
- 稲葉佳子 2008a. 共に生きる街・新宿大久保地区の歴史的変遷. 川村千鶴子編『「移民国家日本」と多文化共生論—多文化都市・新宿の深層』明石書店: 32-49.
- 稲葉佳子 2008b. 受け継がれていく新住民の街の遺伝子. 川村千鶴子編『「移民国家日本」と多文化共生論—多文化都市・新宿の深層』明石書店: 51-74.
- インフォプラント 2006. 『賃貸住宅情報に関する調査』 <http://www.yahoo-vi.co.jp/research/common/pdf/00349.pdf> (最終閲覧日: 2009年11月28日)
- 上野健一 1982. 都市の居住地域構造の発展—因子生態学研究と都市地理学研究との関連を中心として. 地理学評論 55A: 715-734.
- 奥田道大・田嶋淳子編著 1993. 『新宿のアジア系外国人』めこん.
- 園部雅久 1985. 東京の居住分化構造と空間パターン—社会地区分析1980. 人文学報 (東京都立大学) 177: 1-29.
- 田嶋淳子 2005. 都市に埋め込まれるアジア. 吉見俊哉・若林幹夫編『東京スタディーズ』紀伊国屋書店: 45-61.
- 戸井田克己 2005. 『日本の内なる国際化—日系ニューカマーとわたしたち』古今書院.
- 戸所 隆 1986. 『都市空間の立体化』古今書院.
- まち居住研究会 1994. 『外国人居住と変貌する街—まちづくりの新たな課題』学芸出版社.
- 森川 洋 1975. 都市社会地理研究の進展—社会地区分析から因子生態研究へ. 人文地理 27: 638-666.
- 山下宗利 1991. 東京都心部における空間利用の垂直的展開. 山本正三編著『首都圏の空間構造』二宮書店: 107-117.
- Palm, R. and Danis, M. 2001. Residential mobility: The impacts of web-based information on the search process and spatial housing choice patterns. *Urban Geography* 22: 641-655.
(伊藤修一: 駒澤大学・非)

庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編 『日本の言語景観』

三元社 2009年 206p. 2,100円 (税別)

「景観」を重要な概念の1つとする地理学の人間にとって、「景観」と題する本は気になるはずである。本書もその一冊であるが、景観に関する研究蓄積の多い建築学や都市工学系の本ではなく、言語学・日本語学の人を書いたというところがかなりユニークである。書名になっている「言語景観」という用語自体、あまり聞き慣れない言葉で、調べてみると、「言語景観」と題する本は、科研報告書を除けば、本書が日本で初めてのようである。もっとも、“Linguistic landscape(s)”と題する英語の本は、本書の編者の一人であるバックハウスのものを含めて、ここ数年のうちに3冊も

刊行されており、世界の言語学においては最近注目されているテーマのように見受けられる。

前置きが長くなったが、編者についてあらためて記しておく、庄司博史は国立民族学博物館教授で、専門は言語学、ペート・バックハウス (Peter Backhaus) はドイツ-日本研究所研究員で、専門は社会言語学、フロリアン・クルマス (Florian Coulmas) はドイツ-日本研究所長で、専門は同じく社会言語学である。ドイツ-日本研究所の関係者がからんでいるのは、本書が、2004年12月に同研究所で開催された同名のワークショップを出発点とすることによるのであろう。

本書は序文と8つの章からなり、以下のような章立てになっている。

- 序文 日本の言語景観—西欧化, 国際化, そして多民族化 (編者)
- 第1章 多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか (庄司博史)
- 第2章 経済言語学からみた言語景観—過去と現在 (井上史雄)
- 第3章 言語景観と公共圏の起源 (フロリアン・クルマス)
- 第4章 言語景観の中の看板表記とその地域差—小田急線沿線の実態調査報告 (染谷裕子)
- 第5章 地下鉄案内板にみるローマ字表記—東京における1999年の実態 (佐渡島紗織・小林良子・齋藤眞美)
- 第6章 日本の言語景観の行政的背景—東京を事例として (ベート・バックハウス)
- 第7章 視覚障害者にとっての言語景観—東京山手線の点字調査から (山城完治)
- 第8章 言語景観における移民言語のあらわれかた—コリアンコミュニティの言語変容を事例に (金美善)

序文によれば、言語景観の研究は社会言語学分野で特に2000年代に入ってから世界中で行なわれてきたというが、日本においては、「街の表示に関する研究の原点は、地理学者の正井泰夫が1962年に調査した「新宿の都市言語景観」という調査であろう」(9頁)と、正井の研究¹⁾が評価されている。次いで、1980年以前からの日本の言語景観の特徴として、時代順に「西欧化」(＝日本人を対象とした西欧外国語の装飾的使用)、「国際化」(＝外国人のための多言語表示)、「多民族化」(＝在住外国人の掲げる表示)の3つを挙げ、先行研究では主に「西欧化」と近年では「国際化」が観察の対象になっていたとする。言語景観は「言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化するもの」(10頁)と言い、編者たちの最終的な関心が、言語景観を通して、社会との関わりから、日

本の言語の状況を理解することにあることをうかがわせる。その後は本書各章の紹介で、第1章から第3章が第1部理論篇、第4章から第8章が第2部実態研究篇と位置づけられる。

第1章では、編者の庄司が、最近日本で見られるようになった多言語景観を多言語化の観点から見ようとする。論点は多様であるが、多言語表示における情報の送り手を、①外国人と②ホスト社会に大きく分け、さらに①外国人を商店・ビジネスとコミュニティーの2つに、②ホスト社会を商店・ビジネス・交通機関、行政、NGOなどの市民組織、地域住民の4つに細分しているのが目をひく。

第2章は、社会言語学者の井上が書いているが、地理学的にも面白い論点がいくつか出されているので、詳しく紹介しておく。まず、日本の言語景観の歴史的発展が、表記の有力タイプによって、4段階に分けられている。第一段階は、1945年以前の漢字優勢タイプ、第二段階は、1945～70年代のカタカナ優勢タイプ(外来語)、第三段階は、1980～90年代のアルファベット優勢タイプ(英語)、第四段階は、2000年以降のアルファベットプラスタイプ(英語とその他の外国語)で、これは本章のまとめを最初に提示した形になっている。次に、歴史時代の文献の図版によって、室町～明治時代の看板文字を分析し、漢字の増加やひらがなの減少などが指摘されているが(第一段階)、このように古い時代の言語景観が調査できること自体が驚きであった。次いで、正井をはじめ既往の研究に基づいて、20世紀後期の看板の文字表記は、漢字が減少しカタカナが増加していること(第二段階)、最近ではアルファベットが増えていること(第三段階)、アジア系の文字が出現したことなどが述べられる。また、ここでは、「新しい若者向けの商店街ほどアルファベット表記が多い」(60頁)という「都市空間構成内部の地域差」(61頁)が指摘されている点も興味深い。さらに、言語景観の言語の種類については、正井らの研究に基づき、看板の言葉は日本語が減少し、英語が増えていること(第三段階)、東京のデパートの

店内案内パンフレットで多言語化が進んでいること（地域差にも注意を払っている）、山手線駅前の看板における多言語表示の状況（第四段階）が書かれている。その後は、言語景観をめぐるいくつかの論点が掲げられているが、政治や経済との関係と並んで、「景観調査結果を地図化し（中略）考察すると、有意な地理的分布パターンが浮かび上がる」（74頁）と、地理学者顔負けに「言語景観の地理的分布パターン」について述べているのが興味をひかれる。具体的には、①東京のような中心都市・国際都市とそれ以外との違いという日本地図段階の地域差、②大都市周辺・観光地周辺とそれ以外という都県地図段階での地域差、③市街地内の分布密度の違いという市街地図段階での地域差を挙げており、さらに④施設内の多言語使用の差も「見取り図・間取り図などに示せるがこれは従来の地理学の概念から離れる」（74頁）とまで書いている。なお、著者は、（評者には）聞き慣れない「経済言語学」をも名乗り、言語の使用に経済原理が働くことを言うが、経済原理の説明があまり具体的ではなく、物足りなさが残った。

第3章では、編者のクルマスが、言語景観の例として、ハムラビ法典碑やロゼッタ・ストーンといった法令を刻んだ古代の石碑や、旧約聖書にある「メネテケル」という壁への落書きなどを取り上げる。「日本の言語景観」と題する本書には異質な内容であるが、最終的には、公に掲示された言語記号は、法令であれ落書きであれ、読まれることを意図しており、言語景観研究は、景観を創る側の動機と意図を明らかにしなければいけないとする。なお、本章では、言語景観とは言語都市景観であり、言語景観研究は都市に焦点を定めなければならないとしているのが目をひく。

第4章では、日本語学の染谷が、小田急線新百合ヶ丘駅周辺と生田駅周辺の店名看板を2005年に調査して採集した約1,100件のデータから地域差を考察する。文字種（漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベット）ごとの看板件数だけでなく、文字種の組み合わせ方についてもカウントし、新百

合ヶ丘ではアルファベット表記、それもアルファベットの単独表記が最も多いこと、生田では漢字表記が多いことなどが明らかにされる。そして、違いの要因として、新百合ヶ丘は商業ビルが中心であること、生田は昭和50年代までに形成された商店街であることを挙げる。さらに、新百合ヶ丘の4つの商業ビルにおいても、服飾・雑貨店がほとんどの2つのファッションビルと、服飾・雑貨以外の店が入っている他のビルとでは状況が異なることも指摘されている。文字表記の細かい話は、やはり日本語学の議論かと感じるが、第2章の井上と同様に、「地域差」やその地域的背景に目を向けていることに引きつけられる。

第5章では、国語・日本語教育の3人が、東京の地下鉄（延べ）51駅内の案内板に見られる地名や建物名などのローマ字表記について1999年に調査した結果を報告している。たとえば、「～通り」のローマ字表記法は6とおり、「～会館」は9とおりもあるという。表記の幅の要因について検討した後、日本語の読み書きができない人のために、日本語表記の後に「音」をローマ字で示し、その後ろに訳語を示すという表記を提案している。この章では、もっぱらローマ字表記法が問題にされており、景観の議論をしているという印象が薄い。

第6章は、編者のバックハウスが、まず、東京都の公的表示における言語使用についてのマニュアル6種（1990年代以降のもの）を検討する。後半は、行政報告書を主な資料にして、1980年代後半以降の東京都と23区における標識や案内板などの多言語表示事業（著者はこれを「言語景観づくり」と呼ぶ）の進展をたどっている。行政制度や施策の調査なのでやむをえないが、フィールドの匂いのあまりしない章である。

第7章では、自身も視覚障害者である山城が、視覚障害者が徒歩でまちを安全に移動するために必要な情報として、点字ブロック、音の出る信号機、点字表示、声での案内の4つを挙げ、このうち駅での点字表示に関して、1999～2000年に山手線全29駅で、階段の手すりの点字案内表

示 712 件を調査した結果を報告している。この調査は、もともと、点字表示の改善を JR 東日本や国土交通省に働きかけるためのデータ収集が目的だったとのことで、さまざまな不備が指摘されている。これも「景観」なのかという疑問が当然わき起こるが、これについては後で触れたい。

第 8 章では、社会言語学の金が、まず、コリアン集住地域の韓国語・ハングル景観について考察する。新宿のようなニューカマーが集住するところではハングル景観が広がるのに対して、大阪府生野区のようなオールドカマー集住地域では近年までそうではなかったという。その要因として、コリアンの来日時期や世代によって、使用言語やホスト社会に対する意識が異なることを指摘する。コリアンの存在が言語景観に反映される場合と反映されない場合の対比は、興味深く感じられた。次に、日本におけるハングル表示増加の理由として、多民族化（ホスト社会→外国人、外国人→外国人、外国人→ホスト社会の 3 種類の言語情報を考える）、韓国からの旅行者の増加、「韓流」と称される韓国ブームの 3 つを挙げる。最後は、カタカナ表記韓国語に関する言語学的議論である。

以上、各章の内容を、感想をはさみながら紹介してきたが、地理学の人間としては、地域差に関連する内容のある第 2 章、第 4 章、第 8 章が、特に面白く読めた。

さて、本書を読みながら、しばしば考えさせられたのは、そもそも「言語景観」とは何かということである。視覚障害者にとっての点字表示は特殊なので後で触れるとして、たとえば第 5 章で地下鉄駅内の案内板が論じられていることに違和感がある。これは、地理学で「景観」と言う場合、評者の感覚としては、店名看板のように屋外にあるものを想定するからであろう。また、第 1 章や第 8 章ではポスターや貼り紙の例が出されていて、これも素直に受け入れたくない感情が起こるのだが、「景観」とは位置が固定していて容易に動かせないものだという先入観があるからだろう。さらに、第 2 章では、狭い意味の言語景観に

入らないと断ってはいるが、デパートの店内案内パンフレットや行政情報出版物も扱われていて、これを「景観」と呼んでいいのか首をひねりたくなる。

そこで、本書のいくつかの章で言及されている「言語景観」の定義を見てみたい。

まず序文では、「言語景観」を「公共空間で目にする書き言葉」とし、「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」という Landry & Bourhis (1997)²⁾ の定義も紹介している (9 頁)。後者は、「言語景観」の一般的定義として、庄司も第 1 章で引用し、「公共空間」における「可視的」（つまり文字媒体による）な言語使用」と言い換えている (41 頁)。

しかし、これだけでは具体的に何を想定しているかがはっきりしないので、例を挙げている箇所を探すと、第 3 章では、言語景観の要素として「公共道路標識、広告板、街路名、地名、商業的店舗の看板、政府建造物の標識」という Landry & Bourhis (1997) の記述を引用している (82 頁)。また第 7 章では、「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」というバックハウス (2005)³⁾ の定義が引用されており、両者はほぼ同じ内容である。と同時に、屋外にあって動かせないものという上述の評者の先入観からはみ出すものではない。

ところが、第 1 章で庄司が表示物の形態の例として挙げているのは、プレート、看板、ちらし・パンフレット、ポスター、地図などで、設置場所としては、道路・通路、建物外壁・窓、公共施設・公共交通機関内、店内、車両などが例示されている (26 頁)。これらは屋外に限るものではなく、動かせないものばかりでもない。確かに、「公共空間で目にする書き言葉」という序文の定義にある「公共空間」は屋内や交通機関内にも存在するし、「書き言葉」は貼り紙やポスターにもある。金属板に書かれていたら「景観」で、紙に書かれていたら「景観」ではないという議論は、なるほど変である。ただし、「景観とみなすための条件」としては、特に注意して観察する必要がなく、情

報摂取の意図が不在な場合でも、比較的自然に知覚される情報が中心となる」(18頁)という庄司の考えに照らせば、掲示されていない印刷物や、開かなければ読めないパンフレットを「景観」と言うのは無理があるのではないかと感じる。同様に、掲示してあっても、意識して近づかなければ判読できない小さな文字で書かれているものは、「景観」であっても「言語景観」ではないのではないかと考える。ともかく、本書では、「言語景観」をかなり広い意味に拡大解釈していることは指摘できる。

さらに、庄司が「多言語景観」を、「公共の場においてさまざまな形で知覚される、外国語が複合的に形成する景観」(18頁)と定義し、前半部の「さまざまな形で知覚される」に、音声のような文字以外のものも含めていることにも注意しておきたい。これは、第7章で視覚障害者にとっての言語景観が取り上げられていることと呼応する。その第7章では、最後に、点字ブロックや音声案内、手すりの点字表示などは、「視覚的にとらえられるものではないが、視覚障害者にとっては、触覚、聴覚でとらえられる重要な言語景観とみなすことができよう」(185頁)と述べられている。触地図やサウンドスケープの議論とも関わりそうだが、以上のように本書では、「言語景観」の特に「景観」の部分がずいぶん広い意味でとらえられている。

拙評冒頭でも述べたように、「景観」は地理学の重要な概念であるが、景観への関心は社会的にも高まっており、現在では多くの学問分野が研究に加わっている。言語景観も、序文や第2章で正

井の研究が引用されるように、本来、地理学の研究が先行していたはずであるが、社会言語学の研究が急速に進んでいる。正井以後、日本の地理学でどのような議論が行なわれているのか寡聞にして知らないが、たとえば海外の多言語地域で言語の分布を景観で確認するといった素朴なレベルの話では、本書にもあるような近年の社会言語学の研究に見劣りがしてしまう。言語景観の地域差やその地理的背景だけでなく、ほんの思いつきだが、本書では扱われていない(言語学者があまり関心を持ちそうにない)言語景観の大きさや形、色などについても、議論の余地があるかもしれない。いずれにせよ、本書が、地理学において「言語景観」を考え直すきっかけを与えてくれることは間違いないだろう。

注

- 1) 正井泰夫『東京の生活地図』時事通信社、1972。正井には「新宿の喫茶店名——言語景観の文化地理」筑波大学地域研究1, 1983, 49-61頁 という論文もあり、これも引用されている。
- 2) Rodrigue Landry & Richard Y. Bourhis, Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality, *Journal of Language and Social Psychology*, 16 (1), 1997, 23-49.
- 3) P. バックハウス「日本の多言語景観」(真田信治・庄司博史編『日本の多言語社会』岩波書店、2005) 53-56頁。

(小田匡保：駒澤大学)

野瀬泰申『天ぷらにソースをかけますか？ —ニッポン食文化の境界線—』

新潮社 2009年 405p. 590円(税別)

食文化の地方による違いは、地域差の分かりやすい例として、よく取り上げられる。しかし、それをきちんと地図化したものはさほど多くない。

そのようななかで、日本国内にある食文化のさまざまな地域差を地図化したものとして、本書を紹介しておきたい。著者は、現在、日本経済新聞の

特別編集委員で、これまでも『目で食べる日本人』や『秘伝「たこ焼きの踊り食い」』などの著書があり、日本人の日常の食に関心を持って取材を続けている方という。

まず、「まえがき」によって、本書出版の経緯を記しておく。本書のもと、日本経済新聞のウェブサイト「NIKKEI NET」の「食べ物 新日本危行」という連載¹⁾である。2002年11月に始まったこの企画では、毎月、「食文化の地域分布にまつわるテーマを順次設定し、読者のVOTE(投票)を都道府県別に数値化したうえで、毎回その日本地図を作る」(10頁)という作業を行なった。さらに、著者の文章の間には、読者が自分の食を語ったメールの中身も紹介された。連載開始から2008年11月までの6年間に60余りのテーマを取り上げ、そのうち2002年から2003年に調査した12テーマの中の6テーマをまとめたものが、2003年に出た『全日本「食の方言」地図』²⁾である。拙評で紹介する『天ぷらにソースをかけますか?』は、それを文庫化したものだが、文体の改変だけでなく、新たな章が多数追加され、前著とは大きく異なる内容となっている。

「まえがき」以降は、16の章からなっており、最後に椎名誠の解説がつく。章のタイトルだけでは、何の地域差が問題になっているかははっきりしないので、以下、章題は略し、章ごとに設問や回答結果などを紹介しておく。

第一章 ①天ぷらにソースをかけて食べますか。回答：40%以上の都道府県は富山・岐阜・三重以西、20%未満は新潟・群馬・山梨・神奈川以東。「食べ物 新日本危行」の最初のテーマであり、本書のタイトルにもなった設問である。西日本で天ぷらにソースをかけて食べることについて、著者は、明治中期にウスターソースが大阪で販売され、天ぷらを含めて料理に洋式の醤油をかけるのがハイカラとされ広がった可能性を示唆している。②紅ショウガの天ぷらを食べますか。回答：20%以上は近畿、20%未満はそれ以外の地方。

第二章 ナメコの味噌汁は好きですか。回答：「好き」が優勢なのは、福井・岐阜・愛知以東。

その理由として、ナメコは、東日本に多く分布する落葉広葉樹のブナによく発生するという読者のコメントが紹介されている。この章は、ナメコだけでなく、各地のキノコについての話である。

第三章 ばら寿司をよく食べますか。回答：「よく食べる」は福井・滋賀・奈良以西の府県の半分。西日本のばら寿司文化圏は、炊き込みご飯文化圏でもないかという推測が述べられており、第十章とも関連する。なお、地図はないが、いなり寿司の形についても投票してもらっており、ほぼ同じような境界線で、「東の四角(俵型)」「西の三角」に分かれたという。

第四章 小豆やお餅が入った甘い食べ物を何と呼びますか。回答：「お汁粉」が優勢なのは、新潟・長野・静岡以東、「ぜんざい」が優勢なのは、富山・岐阜・愛知以西。関東の「ぜんざい」は餅に小豆あんを載せたもので、粒あんの入った関西の「ぜんざい」は関東で「田舎汁粉」と呼ぶこと、関東の「お汁粉」はこしあんであることにも触れられている。

第五章 唐辛子を「南蛮」と呼びますか、「こしょう」と呼びますか。回答：「南蛮」が優勢なのは、北海道・東北・北陸、「こしょう」が優勢なのは九州。唐辛子は古くは「南蛮胡椒」とも呼ばれており、「南蛮」が東日本で、「胡椒」が九州に定着したという見方を提示している。

第六章 ①中華まんには何かつきますか。回答：「何もつけない」が優勢なのは、福井・岐阜・愛知以東と山陰・四国、「辛子」が優勢なのは近畿・山陽、「酢醤油」が優勢なのは山口・九州。「酢醤油」は、中国の黒酢を模倣したのではないかという説が紹介されている。②中華まんを「肉まん」と呼びますか、「豚まん」ですか。回答：「肉まん」が優勢なのは、富山・岐阜・愛知以東と北四国、「豚まん」が優勢なのは近畿。この設問は、「肉」が「牛」が「豚」かという第九章と関連している。

第七章 ①鉄板で焼くコナモンは好きですか。回答：「大好き」「まあ好き」は富山・長野・愛知以西、「なくても」「どうでも」は新潟・群馬・山梨・静岡以東。②釣鐘型のたこ焼きはありますか？

回答：「ある」「あることもある」は、東北・中部・瀬戸内などに散在。この章は、たこ焼きやお好み焼きなど、各地の「鉄板系コナモン」についての話である。

第八章 ①あなたの町に「サンライズ」はありますか。回答：40%以上は滋賀・京都・兵庫・広島・愛媛。②楕円形で白あんが入ったメロンパンを知っていますか。回答：40%以上は滋賀・京都・兵庫・高知。言葉の説明をしておく、「サンライズ」とは円形でクッキー生地が載ったパンで、多くの地方では「メロンパン」と呼ぶものであり、「サンライズ」のある地方では、楕円形で白あんが入ったパンを「メロンパン」と呼んでいる。著者の推測によれば、楕円形で白あん入りのメロンパンは戦前の神戸で生まれ、それとは別に、あんが入らない円形のサンライズが併存し、これらが関西および西日本の一部に伝播したという。

第九章 「お肉」とは何の肉ですか。回答：「牛」がトップは、富山・岐阜・愛知以西と埼玉・東京・神奈川、「豚」がトップは、新潟・長野・静岡以东と沖縄。この地域差ができた理由について、著者は、次のように考えている。明治初期には東京でも、不浄感のある豚でなく牛を食べていたが、洋食の普及とともに次第に安い豚肉を食べるようになり、大正年間には豚肉食が本格的になった。一方、牛の産地を抱える近畿以西は牛肉が相対的に安く、味も良かったために、大正期になっても豚の需要が少なく、明治以来の牛肉志向が今日まで続いているということである。なお、本文に説明はないが、「天ぷらを揚げた時に出る揚げかすをどう呼ぶか」という設問の結果地図も出されており、「挙げ玉」が過半数を超えたのは、千葉と宮崎だけで、ほとんどの県は「天かす」が優勢である。

第十章（赤飯以外の）豆の炊き込みご飯はありますか。回答：「ある」が多いのは、富山・岐阜・静岡以西。ただし、本章は、地方色の強い豆とその食べ方についての話が主である。

第十一章 ①いわゆる「冷やし中華」を何と呼びますか。回答：「冷麺」が過半数なのは近畿・

高知・福岡、北海道は「冷やしラーメン」が優勢、岩手は「冷やし中華」と「冷風麺」が拮抗、他の地方はほとんど「冷やし中華」が優勢。②それにマヨネーズをつけますか。回答：「つける」が過半数なのは、中京圏・滋賀・佐賀・福島・山形。本書によれば、中京圏に「冷やし中華にマヨネーズ」を広めたのは、この地に店舗展開するファストフード店「スガキヤ」だという。

第十二章 ①赤飯は甘納豆が入っていて甘いですか。回答：「甘い」のは北海道・青森。甘納豆入り赤飯は、札幌市にある光塩学園女子短期大学初代学長が昭和20～30年代に地元のラジオ番組や料理講習会で紹介したのが広まったという説が紹介されている。②茶わん蒸しは栗の甘露煮が入っていて甘いですか。回答：「入れる」が過半数なのは、北海道・青森・秋田。③卵焼きは砂糖が入っていて甘いですか。回答：説明の文章はないが、地図で「甘い」が優勢なのは、富山・岐阜・静岡以东（関東を除く）、西日本にも散在。

第十三章 ①味噌汁に唐辛子を入れますか。回答：「入れる」が圧倒的に多いのは、秋田・栃木・群馬・千葉。②味噌汁にニラを入れますか。回答：「入れる」が優勢なのは、北海道・東北・北関東。ただし、本章は、味噌汁の具よりも味噌の種類についての議論が主である（麦味噌は九州と瀬戸内西部、豆味噌は愛知・三重・岐阜、その他の地方は米味噌）。

第十四章 ①漬物を煮ますか。回答：「煮る」が優勢なのは、山形・新潟・北陸・山梨・長野・滋賀。②「福神漬」を何と読みますか。回答：「ふくじんづけ」が優勢なのは、福井・滋賀・愛知以东のほとんどと山陰・九州、「ふくしんづけ」が優勢なのは、北海道・北陸・南近畿・四国・沖縄。ちなみに、国語辞典の見出しは「ふくじんづけ」と読んでおり、この原稿を書いているワープロも、「ふくしんづけ」では漢字変換されなかった。

第十五章 ①カレーライスに卵をのせるなら生卵ですか、ゆで卵ですか。回答：「生卵」が優勢なのは、石川・岐阜・愛知以西、「ゆで卵」が優勢なのは、富山・長野・静岡以东と北九州・山口。

関西人がカレーライスに生卵を落とすことについて、著者は、その前に「カレーにはソース」というかき混ぜ型の食べ方があったからだと推論している。②「カレーそば」はありますか。回答:「普通にある」が過半数なのは、北海道・宮城・茨城・群馬・東京で、東日本に多く、西日本に少ない。著者は、大阪では明治末期に「カレーそば」が生まれ大ヒットしたが、「カレーうどん」がそれを追いかけて、うどん文化圏の関西人の舌に合っただけで、「カレーそば」を駆逐したと推測している。

ここまでは、インターネットで読者の投票を募り、結果を集計して食文化の地域差を見るという手法をとっていたが、第十六章ではスタイルが一転する。すなわち、著者が新聞記者の本領を發揮して、「食文化の境界線を自分の足で確認」(308頁)しようとするもので、具体的には、2007年2月から4月にかけて、東京から京都まで旧東海道を35日間通して歩き、食に関する毎日の見聞を日記風につづっている。著者が選んだテーマは、「サンマラーメン」(横浜生まれのあんかけモヤシラーメン)の存在地帯、白ネギ(東)と青ネギ(西)の境界、黒はんぺん地帯、イルカを食べる地帯、名古屋の喫茶店のモーニングサービス地帯、そば(東)とうどん(西)の境界、豆味噌優位の地帯、うなぎの蒲焼の「背開き・蒸す」(東)と「腹開き・蒸さない」(西)の境界、(食物ではないが)灯油を入れるポリタンクの色が赤(東)か青(西)かの境界などである。歩く道すがら、飲食店のメニューやスーパーの商品を見たり、話を聞いたり、実際に食べたりして、著者はそれぞれの境界を画定していく。その境界は、最後に1枚の地図にまとめられており、分かりやすい。

以上、長々と内容を紹介してきたが、本書は、日本の日常食のさまざまな地域差(著者は「地域偏差」という言葉をよく使う)を見事に明らかにしている。また、単に地域差を示すだけでなく、いくつかの章においては、食物史の研究文献を踏まえて、その要因にまで言及されている。投票結果に至るまでに読者の軽い文体のメールがたくさん引用され、井戸端会議の渦中にあるようで、う

んざりする面もあるのだが、評者自身の個人的経験を思い起こしながら、どの章も興味深く読んだ。

最後に、いくつかコメントを付しておきたい。拙評の冒頭にも述べたように、本書は食文化の地域差を地図化している点において、類書に比べて際立っているが、実は、その地図の表現に問題がある。すなわち、コロプレスマップの各階級の濃淡あるいはパターンが、階級の順序に対応していないのである。たとえば、第一章の「天ぷらにソースをかけて食べますか」では、80%以上の最も値の大きいクラスが白で、値が小さくなるほど模様が濃くなるという、本来とは正反対の濃淡の順序にしてしまっている。他の地図も合わせると、ほとんどの地図では、階級が何を表現しているかにかかわらず、凡例の上から順に白・薄灰・濃灰・黒・ドット・垂直平行線という色あるいはパターンを機械的に当てはめていることに気がつく。これでは、せつかくの地図が台なしで、表現しようとするものが直感的に伝わらない。ただし、もとのウェブサイトでは、地図はカラーで表現されており、色の選択や順序はそれほど不適切ではない。書籍化にあたって、地図のモノクロ化はやむをえなかったかもしれないが、モノクロでも適切な表現は可能であり、表現がずさんになったのは非常に残念である。教材などで地図を引用する場合は、ウェブサイトのものを利用することをお薦めする。

やはり地図に関連する事柄だが、データ処理のプロセスが不明確なことにも不満が残る。上述のように、第一章の地図は20%間隔で階級区分しており、「はい」と回答した人の割合をそのまま用いていることが分かるので問題ないが、第二章以下の地図は、たとえば第三章で「よく食べる」「たまに食べる」「ほとんど食べない」と三分しているように、階級区分の基準が数値で示されていない。また、第十三章では、5つの選択肢それぞれに+2から-2までの値を与え、回答の合計値を4つに階級区分するという操作を行なっているが(著者はこれを「指数化」と呼んでいる。第十五章も同様)、クラス分けの基準値が不明確なのは

同じである。おそらく本書では、一般の読者を念頭に置いて、技術的なことは省略したのであろうが、研究として見た場合にはやはり物足りない(ただし、ウェブサイトでは、都道府県別の各選択肢のパーセンテージを知ることができ、ここから区分の基準値を推定することは可能である)。

データに関してさらに言えば、投票総数が不明で、サンプルとして十分な数の調査になっているかどうか分からない点も問題である。本書中の断片的な記述⁹⁾から判断すると、全部で1000あるいは2000を超える回答はあるようであり、インターネットを使うことによる回答者の属性の偏りは免れないにしても、大まかな傾向は把握できそうである。ただ、回答の少ない県だと、10くらいしか回答がないことも想定される。その場合、1人の回答が違っただけで結果が10%も変わってくることになる。回答数はもっと多いのが望ましいが、個人でこれだけの回答を短期間に集めることは困難であり、日本経済新聞のウェブサイトだからこそ可能な調査であって、所詮はないものねだりの願望であろうか。

以上、技術的な面での要望を述べてきたが、全体としては、地域差を明快に示した一般向けの読みやすい本として、学生にも薦められる一冊である。本書のもとになったウェブサイトの「食べ物新日本危行」には、他にも多くの項目が挙がっており、関心のある向きは、こちらも閲覧されるとよからう。

注

- 1) 「食べ物 新日本危行」は、2009年12月現在も、次のURLで連載が続いており、「創刊号」からのバックナンバー記事や多くの「食べ物 日本地図」も掲載されている。
<http://waga.nikkei.co.jp/play/kiko.aspx>
- 2) 野瀬泰申『全日本「食の方言」地図』日本経済新聞社、2003。
- 3) 本書10頁には「初回のVOTEが千通を軽く超えた」、209頁には「有効回答二千百六十四」とある。

(小田匡保：駒澤大学)